

「オッサンもう少し頭を働かしたらどや」

増山雄三

戦国時代末期に、スペイン人から貰った、  
角栄螺という南蛮兜を被った武士が、上杉景  
勝の家中にいたが、それは侍大将の「岡野左  
内」という人物だが、そんな貴重なものを持  
っていたというのは、もとは越後古志郡柿村  
の城主で、代々がこの地方の土豪だったため  
に、かなりの金持ちであったからだ。

それで、慶長六年の関ヶ原の役の後、政情  
不安に乗じて伊達政宗が、上杉領を攻め込ん  
できた時、左内は阿武隈川にある、上杉家の  
出城である松川城に駐屯していたが、彼は小  
勢ながら大軍の伊達をあしらい、兵を引いて  
自らも退却しようとした。  
そこを、政宗自らが左内を追ってきて、逃  
げる左内の羽織を二太刀切り裂いたので、切  
られながらも左内は、振り返りざま政宗の兜

を真つ向から切り下げ、さらに政宗の右膝に切りつけたが、そのまま馬頭を巡らして逃げ、川へ馬を乗り入れてしまった。

それを政宗はあとを追い、「かえせ」というと左内は笑い、「剛の者は、多勢の中には引き返さぬ」といって、向こう岸に馬を引き上げ、さっさと味方の陣の中に隠れたが、後でその時の相手が敵の大將だった、伊達政宗と知って、左内は膝をうって残念がった。

この合戦での左内のいでたちは、先に述べたスペインの兜に、金銀の縫取りをした緋の陣羽織をはおり、岡崎入道正宗の名刀を使っていたので、格闘の際に、政宗の刀を一撃のもとに、鰐元から断ち切っているが、上杉家の一武將に過ぎない左内の方が、軍装には政宗よりも金がかかっていたという訳だ。

この岡野左内は、ケチンボで金を貯めるのが大好きだったようで、貯め込んだ金銀を、月に二、三度は蔵から出して虫干しをし、そのあと居室にばら撒き、その上に素っ裸でゴ

口ネをするのが、唯一の楽しみだった。

関ヶ原ののち、上杉家が西軍加担の罪によつて、封地百二十万石から三十万石に削られたとき、人員整理が行われて、左内は家中でも大禄の方だったので、「それがしがいなければ、殿様も楽をなさろう」といって、自分から退転してしまった。

そして、これ程の戦上手が上杉家から去つたと聞いて、伊達政宗が使者をよこして、三万石で召しかけようといったが、左内はもと蒲生氏郷の旧臣だったので、年を取れば昔の主家が懐かしくなるといい、氏郷の遺子が在城する猪苗代へ行つて、余生を送つて死んだが、遺言で金子三千両を贈り、戦国時代の生んだ拝金主義者の、見事な一生だった。

ところで、大阪に、戦時中は飛行機献納運動に挺身し、敗戦後は税金完納に余生を捧げようと考えた、変な老人がいたというが、自分の税金を過大に評価し、遂に、戦後の納税額が三億円を超えたという。

それで、その突破の日、大阪の生魂さんにお参りし、その旨を報告したが、大阪の神仏はいささかがラが悪いので、「オツサンもう少し頭を働かせたらどや」と、今の左内さんを、余り感心してくれないかも知れない。

令和四年四月